

平成28年度 新潟市潟環境研究所 第5回定例会議（概要）

日時：平成28年11月24日（木）

場所：市役所本館 - 対策室1

■会議概要

1 報告及び情報提供

- ・『水辺シンポジウム 2016～再生から川まちづくり&潟ライフブランドへ～』について
(NPO 法人新潟水辺の会)
- ・『「水利が拓く 実りの明日へ」連続講座 第3回～水利の歴史と新潟農業の今～』について
(藤井大三郎 まちづくり田園アドバイザー)
- ・潟めぐりスタンプラリーの応募状況などについて（文化創造推進課）
- ・新潟市の鳥「ハクチョウ」と潟エコツアーの開催について（環境政策課）
- ・松浜の池と内沼潟の映像紹介（加藤 功／潟環境研究所外部相談員）

2 講義

新潟の妖怪（高橋郁丸／潟環境研究所協力研究員）

- ・妖怪研究の父・越後出身の井上円了の唱えた「妖怪」は実在する「実怪」と実在しない「虚怪」にわかれ、「実怪」の中でも科学的に説明のつかない「真怪」がある。これを解明することが必要である。
- ・新潟市内には低湿地帯の妖怪が非常に多い。
- ・水、川や潟の周りには非常に不思議な話がたくさんある。それだけ被害に遭われた方がたくさんいて、それをなくすために妖怪を鎮めたり仏様に祈ったりして鎮めていったという歴史があるのではないかな。

【水と土 低湿地との闘い～自然の脅威が妖怪であった～】

○北越奇談

- ・1812年刊。橘崑崙著。水にまつわる不思議な話が多くでてくる。北越奇談の挿絵がすべて葛飾北斎の挿絵。（一部筆者・崑崙の絵もあり）。
- ・「北越は水国なり」「地沢（ちたく）星のごとく、なかんずく湛水（たんすい）の大なるもの鎧潟と名づく」「誠に北越は天下無双の水国たるべししかるがゆへに龍蛇（りゅうだ）の化無量にして、海より出て山に入り、山より来たって湖水に入る。水を巻き雲を起し、不時（ふじ）の風雨をなすこと年ごとに人の見る所なり」という文章からはじまる。
- ・「闘竜」、「巻水」など、龍が起こしたのではないかと思われる不思議な話がでてくる。

○慈光寺の大蛇と白山神社の蛇松明神社（新潟市中央区）

- ・五泉市の慈光寺の大蛇と白山神社にまつられる蛇とはつながりがある。慈光寺の住職が山を荒らした大蛇を追い出したところ、大蛇は能代川から小阿賀野川に入って信濃川を日本海側に逃げ、その途中で溺れた。その大蛇を白山神社の神主が神社の裏にまつたという話。

○本住寺の蛇頭さま（新潟市秋葉区横川浜）

- ・元和6年（1620）肝煎長沢惣右衛門が新発田藩主二代目溝口宣勝に横川浜界限開拓を願い出てお許しを頂き、開発着手。長沢は横川浜の鎌倉潟に住むと思われる主に、潟を明け渡すように願った。法要では主と思われる大蛇の頭骸骨を御開帳する。蛇頭法要は11月7日の宗祖御会式時に行われる。

○河童の膏薬「アイス」と「河童祭り」

- ・猫山宮尾病院（中央区）では、悪さをする河童を捕え、許した礼に授けられたアイスという湿布薬があった。また、西蒲区針ヶ曾根では許した河童が悪さをしなくなったため、感謝のために河童祭りを行っている。

○王瀬長者と鮭のオオスケコスケ

- ・中央区沼垂から東区あたりにあったという王瀬長者と、鮭の精霊オオスケコスケの伝説。オオスケコスケが川を遡上する時には川に近づいてはいけなかった。

【水と土～人間同士の争い～】

首が飛ぶ伝説としては、「田辺小兵衛」、「高橋源助」、「黒鳥兵衛」、「酒呑童子」がある。

○馬堀の首塚と首祭り

馬堀の名主であった田辺小兵衛は、水害や日照りに悩む農民のため、長岡藩に直訴して西川から馬堀まで水路を引いたが、細工をされて通水しなかったため、約束によって首をはねられた。しかし、はねられた首が細工の板をくわえて無事に水を通水させたという逸話がある。罪人扱いとなった小兵衛は墓を作ることも許されなかったが、百年後に村人が三根山藩に願い出て墓を作った。それ以降、小兵衛の法要「首祭り」が続いている。

○西蒲区曾根の「お仙地藏」

西川が破堤したときにお仙という少女が自ら人柱になると言っ川に飛び込むと、破堤が止まったという。お仙地藏はよだれかけではなく、着物が着せられている。水の中に入り寒かっただろうということで、着物の前が足元までしっかり留められているのかもしれない。

3 (仮称) 潟環境研究所活動報告書に関する意見交換について

【説明要旨】

- 報告書の構成案について説明
- 提言の骨子案の確認

【外部相談員からの主な意見】

- ・将来的には水田地帯も含めたラムサール条約の登録を目指すという話が出てきても良い。
- ・なぜ新潟がアイデンティティとして「潟」にこだわっているのかについて、歴史的な背景を踏まえて説明した方がいい。
- ・「ラムサール条約に登録されると治水等の障害になるのではないか」という誤解を解き、そのイメージを払拭しないとしない。
- ・区役所などで展示スペースを設けて、博物館に貯蔵されている資料を展示し、来庁者に見てもらえれば、地域の文化への理解や新潟の文化の発信につながる。
- ・鳥屋野潟はずいぶん変わりつつある。将来的に鳥屋野潟のラムサール登録を目指すということはよい。しかし、今の鳥屋野潟の整備がしっかりと終わった後で、ラムサール条約登録がついてくればよいとも考える。地域がしっかりと理解した上で進めるべき。
- ・福島潟のラムサール登録については、新潟市だけで進めて盛り上げるのではなく、新潟市と新発田市が一緒にできるような取り組みを考えてみるなど、連携を図るべき。
- ・「どこかの潟で舟に乗ることができ、水辺からの景観が味わえる」といった、水辺空間での楽しみは、一つの売りになる。潟に近づくための親水空間づくりの一つとして検討してほしい。
- ・現在の潟の自然は、外来の動植物が主人公になっているところが多く、自然の質が低下している。外来生物対策や生き物の生活空間づくりについての視点も重要。
- ・経済的な価値だけが重要ではないはず。経済的な価値を生み出すことだけで、果たして地域が活性化することにつながるのだろうかという思いがある。
- ・大規模な開発、大きな作用圧が潟に加えられる以前の時代は、潟と人がお互いに利益を享受し合う関係で、いい関係だった。この潟と人との関係を、環境や景観、施設の整備をしていく中で、これからの人たちにもわかる形、目に見えるような形で表現できればいい。
- ・じゅんさい池公園は、子どもにとって非常に怖い所だというイメージになっている。経済性や人寄せばかりを考えたイベントや整備は、子どもにとって安全・安心なものになるとは限らない。子どもたちも気軽に行けるような空間にしてほしい。
- ・宮城県大崎市の事例で、子どもたちを相手にした月1回の観察会とか色々な体験プログラムがあり、市内に環境団体が沢山ある。それを行政側がマネージメントして、運営にも参加してもらっている。そういう視点も取り入れてもらいたい。